

神の裁きと訣別するため

murashit

●

• きみは、きみがはじめてじゃんけんを知ったときから、きみは、一度もじゃんけんに負けたことがない

• きみは、夜の池袋西口の公園で、きみは、今日も自身を負かすだれかを待っている

• 若い男がきみに声をかける

• よくあるナンパだ

• それはとても暑い日のことで、こんな時間になっても蝉のなきごえがきこえてくる

• ここは都会だから

• 無数の室外機がきみにむかって熱風をふきかけている

• 若い男にはそっぽをむいたままだ

• 酔っぱらっているにしたって、呼びかけかたがうまくない

• きみはしばらくのあいだ、きこえていないふりをする

• 短く切り揃えられた髪

- 年齢は、十八、九くらいに見える
- だけれども、いつまでも無視しているわけにもいかない
- 男は……おそらく二十は超えているのだろう
- ただ、正直よくわからない、三十をとうに過ぎているようにも見える
- だからきみは、じゃんけんに勝ったならついていってもよいとこたえる
- いつものことだ
- 三回勝負だからときみはいう
- 男おもしろがって、いいよと請け負う
- さて
- じゃん
- けん
- それからきみは、一度目にチヨキをだす
- 男がだしたのはパーだ
 - 黒ぐろとした背景をそれひとつでいなしにする、ひどく欠点のめだつパーだ
 - それを自信満々にだせる男のことを、ぼくはなかなか好ましいと感じた
- それからきみは、二度目にパーをだす
- 男がだしたのはグーだ
 - 教訓のないおとぎ話みたいなグーだ
 - 男が今日もおなじ場所をぐるぐるとまわっている、そんな姿が目には浮かぶようだ

- きみの勝ちだ
- まあいいじゃん
- なおも男は強引に誘おうとする
- けれど、きみは聞こうとしない
- やっぱり下手くそな強引さだ
- 通りすぎる女たちふたりがそれを横目にみている
 - 女たちは毎日のようにここへやってくるから、きみのことをよく知っている
 - よく知っているから近づこうともしない
 - 女たちにはこれからともしあわせな結末が待っている
 - そのまえにすこしだけの試練が待っている
 - きみのことを忘れてしまっただけから、さらにずっとあとの話だ
 - だけれども、それはまた別の話だ
- じゃあもう一度
- と、きみはあらためての三回勝負を申し出る
 - チャンスがめぐってきたにしては怪訝さを隠せない、そんな顔をする
 - そんなにじゃんけんにこだわるものか？
- 一度目、男は負ける
 - さて、三回連続でじゃんけんに負ける確率は何パーセントだっけ？
 - まあ、それほどめづらしいことじゃない

・二度目、男は負ける

・ふむ

・もう一度やる？

・男は負ける

・男は負ける

・ところで今夜は空が澄んでいて、やけに星がきれいにみえる、池袋のくせに

・まだやる？

・こうなったら意地だ

・男にとつて、誘えるかどうかなんてもう関係ない

・だが、男は負ける

・そしてもう一度

・男は負ける

・空が澄んでいるといえば、この公園でナツキたちのちょうど反対側にいる男の話

・彼の故郷の町は、この国でいつとうきれいな星がみえる場所なのだと言張ってはばからな

かった

・町のはずれの小高い山の上にはそれほど大きくない天文台があった

・だけれども、だれかがなにかを研究しているというわけでもなかった

・町にはときどき天体観測会の告知が貼り出され、おさないころの彼は欠かさず参加してい

た

- じゃんけんをして、勝った順に天体望遠鏡を覗かせてもらえる、それがたのしみだった
- 男はいま空を見上げて、街灯のまぶしさに目をしかめている
- だけれども、それもまた別の話だ

• もう一度

• もう一度

• もう一度

• 何パーセントだ？

• 男は負けつづける

• もういち……

• いや

• 気味が悪い

• 気味が悪いじゃないか

• そして、だから、男はあいまいに笑いながら去っていく

• そのとき、蟬が木からぼとりと落ちて、わかりやすく死んだ

• 次の年、そこからちょうど三センチメートル離れた場所に、やはり蟬が落ちて死んだ

• その次の年、その二箇所と二等辺三角形を作る、双方からちょうど二センチメートルずつ離れた場所に、蟬が落ちて死んだ

• それから何年かたって、木は切り倒され、かわりにベンチが置かれた

• 日射しをさえぎるものがなかったから、ちょうどこの夏のように暑い日、の昼、には不人気な

場所になった

- ぼくはそれを見ていない
- だけれども、それもまた、それもまた別の話だ
- そんなことが毎日のように起こっている
- この宇宙で
- きみは明日も池袋西口の公園で自分に勝てる何者かを待つのだろう
- きみの名前はナツキという



- ナツキがじゃんけんをするとき、「ぼん」という掛け声にあわせてだしているのは次の三つ
- 完全なグー
- まったき真球
- 石のことだ
- それはナツキにとって、外界を寄せ付けない孤独の象徴だ
- 完全なパー
- どこまでもつづく平面
- 紙のことだ
- それはナツキにとっての記録、すなわち過去の象徴だ

• 完全なチョキ

• つながり切断するもの

• ハサミのことだ

• 逆説的にも、それはナツキにとって他者との関係を象徴していた

• 昨日見た夢

• すべてがうまくいくようだった、ようやく見つけ出したのだと思った

• それこそが完全であるということだった

• さて、朝起きて、再現してみようとする

• 当然のごとくうまくいかない

• あらゆる辻褃が合わないまま

• だが、じゃんけん昨日見た夢をだすことはないんじゃないだろうか

• さて、完全なグーについて

• つまり、ナツキの孤独について

• そうだな、あなたはどんなときにじゃんけんをするだろうか？

• 双方が、あるいはその場のみなが運に任せてよいと思えるなにかを決めるときに、じゃんけんをするのではないか

• ナツキは完全なグーをだし、完全なパーをだし、完全なチョキをだす

• だからナツキは、ぜつたいにじゃんけんに勝ってしまう

• だからナツキがじゃんけんに負けることは、ぜつたいにない

- それがナツキの孤独の原因だったといえば、あなたはのおおげさに感じるだろうか？
- だって、この宇宙ではだれもがじゃんけんをする
 - この宇宙ではだれもがグーとチョキとパーに運命をたくす
 - ほかの宇宙でどうなのかはよく知らないけれど
- ところで、あなたはじゃんけんの起源を知っているだろうか？
 - 実はそれほど古いものでもないらしく、あきらかに資料が残っているという意味での歴史としては、それこそ数百年程度のものだという
 - だれもが知るようになってからは、百年も経っていない
 - どうもそうらしい
 - してみると、それなりに若い宇宙なのかもしれない
 - もしかしたら、ひどく若い宇宙なのかもしれない
 - ひどく下手くそで強引な宇宙なのかもしれない
- 昔の話といえば、そうだ、こんなおとぎ話がある
 - あるところにひとりの囚人がいた
 - 彼はほかの囚人たちとともに、どこか知らない辺境の土地で、その地の開拓に従事させられていた
 - 毎日毎日木を切り倒しては運んでいた
 - 知っているだろうか、木を切つて運ぶというのはなかなか大変な仕事なんだ
- さて、ある日のこと

・ 囚人たちを管理する役人のかしらがやってきて、彼に命じる

・ おまえには明日からとても重要な役目を担ってもらわねばならない

・ おまえには選ぶ権利がない

・ けれども、安心するがいい、おまえみたいな重罪人にはもつたないくらい楽な

仕事だ

・ けれども、いまでは、この宇宙ではだれもがじゃんけんをする

・ だから、ナツキはうとまれる

・ だって、気味が悪いだろう？

・ だれかをうとむ理由なんて、それだけあれば充分だろう？

・ だから、ナツキはつまらない仲間とのつまらないおしゃべりが嫌いだった

・ いや、つまらないおしゃべりをするつまらない仲間なんていなかったから、つまり、つま

らない仲間とのつまらないおしゃべりをするつまらない奴が嫌いだった

・ そんなわけないはずだったんだ

・ ほんとうは懂れていたにきまつているんだ

・ だから、あたりまえのことだけれど、ナツキにとって勝つことは呪いだだった

・ ふむ

・ どうにも狭い学校という世界の話をしているから、あなたはつまらないと感じたんじゃないだろうか

・ けれども、それがナツキにとって世界のすべて

- ……のうちの半分だったから
- もう半分についてはあとで話そう
- 続いて、完全なパーについて
- つまり、ナツキの記憶について
- ナツキが思い出せるかぎり最初の記憶は、はじめてのじゃんけん、そのときのことだ
- ぼくはナツキがはじめてじゃんけんをしたときのことを知っている
- だって、この目で見たのだ
- それもやはり、暑い夏の日のことだった
- そうだ、ぼくがじゃんけんを教えただ
- ほら、手をひろげて
- これがパーだ
- ほら、指をぜんぶとじて
- これがグーだ
- 次はちよつとむずかしい
- まずは手を広げて、そう、パーみたいに
- それから小指、そうそこ、それから薬指も
- 人差し指と中指はそのまま、そのままそのまま
- いいぞ
- で、親指もとじる

• そうそう

• それがチヨキだ

• チヨキはちよつとむずかしい

• ひとりで歯をみがくくらい、むずかしい

• ゆうやけこやけが流れはじめるまでずっと鬼にみつからずすむくらい、むずかしい

• じゃあ、やってみよう

• いまから「じゃん、けん」と言うから

• なにをだすか頭のなかで決めるんだ

• それから「ぼん」と言ったら

• さっきの三つのうちどれかをだす

• いいかい？

• ナツキはこくりとうなずく

• ものわがりのいい子だ

• じゃん

• なにをだそう？

• こないだの休日を作ったキムチチャーハンは失敗だった

• キムチを入れるタイミングがむずかしい

• けん

- あまり早く入れすぎると、白菜にすっかり火が通ってしまっとうれしくない
- 最後の最後に入れてみると、キムチがなんだかべちゃついてしまって好きじゃない
- ナツキはなにをだす？
- ぼん
- ちようどいいタイミングというものがわからない
- ぼくはパーをだした
- いきなりチョコキをだすのはむずかしいだろうと思ったのだ
- ぼくがだしたのは、これまたひどく欠点の目立つパーだった
- ナツキはチョコキをだした
- ひどくぶかつこうなチョコキだった
- 親指が中途半端に浮いていた
- だけれども、それはこの宇宙にあらわれたはじめての完全なチョコキだった
- そのことを、ぼくはまだ知らなかったけれど
- そんな完全なチョコキに、ぼくは負けた
- だから、完全なチョコキについて
- それはまず、彼女の母親について
- 歳の離れたきょうだいたちが家を出てからあと
- ナツキは家庭での時間、その多くを母親とふたりですごした
- 母親は比較のおだやかな性格をしていたけれど、喋りかたに多少キツいところがある

- というより、言葉の選びかたがちよっとばかり乱暴なのだ
- そのせいか、「サバサバした性格」と評されることが多かった
- 彼女は酒を飲むたびにそのことをぼやいていた
- とはいえ、まんざらでもなさそうに見えはしたけれど
- あとはなんだっけな
- そういえば、晩酌が好きだった
- だいたい毎晩酒を飲んで、次の日に宿酔いのまま仕事に出していた
- ひとりめの子供が生まれてからしばらくやめていたが、乳離れするやいなや晩酌を再開した
- ふたりめの子供が生まれてからしばらくやめていたが、やっぱり乳離れするやいなや再開した
- さんにんめの子供が生まれてから晩酌をやめて、それ以来一滴も飲まなくなった
- その子がナツキだった
- そして、彼女の兄について
- 知られているだけで三千を超える並行宇宙のうち、その過半数には兄がいる
- ただ、この宇宙にはすでにいないことを、ぼくは確認している
- だからおおむね、いるのだといっているのだろう
- ある宇宙において、ナツキは兄を探したことがある
- その宇宙はここよりもずっと、なんとというか、こみいったしくみをしている

• その宇宙は都市の連続でできていて、そのときどきで都市と都市との接続が変化するらしい

• 列車を乗り継いで都市と都市を往還する

• できないこともある

• ナツキは兄を探して、人でいっぱい地下鉄で他人の足を踏み、あるいはだれもいないコンパートメントで眠ったりした

• ナツキは兄を探して、喧騒を乗り継いで、それから兄を見つけたり見つけなかったりした

• それから、彼女の姉について

• もくもくと小さな石を食べ、それから予言をする彼女は、広くはないコミュニティのなかで崇拜の対象となっていた

• まあ、ひとつの小さな街、そのていどの話だ

• ある日彼女は大きすぎる石を飲み込んでそのまま死んだ

• すべての宇宙で死んだ

• 彼女の予言はとても正確で、それなりに残酷だった

• 彼女はなかなか怠惰な性格で、とてもとても残酷だった

• 「弟子たち」の修行と称してなにかひどいことをさせていたと聞く

• そのあたりの事情について、ぼくはそれほど詳しくはない

• 何人が死んだ、というのは噂でしかないけれど、とてもありそうな話に思えてし

まう

・各種報道を通じて見聞きしたところによると、彼女たちの集まる一軒家、その隣人たちのいさかいがもとだという

・さまざま宇宙で、彼女にはさまざまな予言の方法と、それにもなう死因があった
・けれども、隣人たちといざこざを起こしていたことは共通していたようだった
・もちろん、ナツキ自身について

・……は、もう話したか

・それとも、おとぎ話の続きをしようか

・次の日の朝早く、彼は両手を縛られ馬車に乗せられる

・彼が放り込まれた荷台は幌で覆われ、外は見えない

・移動中に食べ物は与えない、大便も小便も垂れるに任せよとのこと

・馬車はときおり休憩を挟みながら一昼夜走りつづける

・御者はふたり

・華奢で陽気な男と、小太りで不機嫌そうな男

・話し声がときどき聞こえてくる

・おおむね言い争いだ

・ともあれ、それも一昼夜だけのこと

・目的地に着くまで、たいした苦痛もなかった

・御者の大きいほうに、乱暴に腕を引かれ、外に連れ出されると

• そこには大きな白い塔

• 紹介がすんだから、あとちよっとだけ、この宇宙でのナツキと家族との関係について、いくつ
か補足しておくべきだろう

• ナツキと母

• そこそこ仲良くやっていたようではある

• ナツキに友達がないことを心配しているようでいて、実際のところそれほど気には
していなかったようではある

• 家ではあまり暗い顔をしなかったからだろう

• その実ナツキが母親のことをどう思っていたかはよくわからない

• もちろん、母親がナツキのことをほんとうはどう思っていたかだつてわからない

• だけれども、ぼくは、きっと仲が良かったのだと信じている

• 彼女はぼくもナツキも知らない場所でも生活をつづけている

• ナツキと兄

• 多少歳の離れたきょうだいだったから、彼らは互いのことをよく知らなかった

• ただ、会えばそれなりにしゃべりもするし

• そのくらいの距離感だからこそなのかもしれない、兄は妹のことを人並みには可愛が
っているように見えた

• 彼の友人のひとりに、とても臆病で、なにかをいうたびに、いやわからんけど、と付
け加える男がいた

• ときどき家にやってくるものの、いつもナツキに会うことを怖がっていた

• ただ、ナツキは彼のがちよつとだけ好きだった

• 違うな、これはまた別の宇宙の話だ

• ナツキと姉

• さつきも言ったように、きょうだいのなかではちよつと変わり者だった

• じゃんけんて勝ちつづけることと、どちらが変わっているかというのはちよつと

難しい問題ではある

• 兄とちがつて面倒見がいい性格でもなかったし、どちらかといえばナツキのことをけむたがっていたようにも思える

• 母が自分のことをかまってくれなくなったうらみのようなものがあつたのかもしれない
い

• これだつてただの想像でしかないけれど

• 中学を出てすぐに家から出て行ってしまい、ナツキとの接点は、やつぱりあまりない
らしかつた

• そんなふうだった

• なにを言うべきで、なにを言うべきでないか、ぼくにはよくわからないんだ

• ナツキと、しかたない、そうだ、最後に、ぼくについて



- あなたがやってきたのは突然だった
- それもある日のことだった
- またわたしは池袋の西口公園にいる
- そろそろ夏が終わりそうだ
- もう終わったのかな？
- 昼間はひどく暑かったけれど、いまはずいぶん涼しい
- ぼくはきみに勝てる
- そうあなたは言う
- 雲が月を覆い隠そうとする
- しかし月はそれに必死で抗っていた
- お、ゲーとパーじゃん
- じゃんけんをするってこと？
- どうしてあなたはそのことを知っているのだろうか
- そういうことだ
- 女性が二人、こちらを見やりながら通りすぎていく
- 華やかに着飾って、なんだか楽しそうだ

- じつは彼女たちのことを、わたしは知っている
- 一方的にだけれど、何度も見かけているから
- なぜなら、とあなたは言う
- あなたは言う、ぼくはきみの父親なのだ
- わたしにじゃんけんを教えたのがこの男なのだ、そのときはじめて気がついた
- 同時に、あのおとぎ話のことを思い出した
 - ただっぴろい平野のなかに、忽然とそびえる白い塔
 - 近づいていくにつれ、その基層がずいぶんと太いことに男は気付く
 - 直径はおそらく半里ほど、見上げれば、すこしずつ細くなりながら雲の上まで伸びている
 - 壁面は凹凸もなくのっぺりとして見え、人間が造つたもののように思えない
 - ほどほどに近づいたところで、小屋があった
 - たどりつけばさっそくに、いかめしい顔の官吏が命ずる
 - おまえはこれから、この塔の周囲を休まず回りつづけなければならぬ
 - お前が寝ているあいだにはほかのやつに代わるから心配ない
 - けれども、起きているあいだはずっと回りつづけるんだ
 - そのあいだ、塔から目を離すんじゃないぞ
 - お前の仕事は、言つてしまえばそれだけのことだ
- すべてを知っていると

• 完全なものがあったいなにか、それを知っていると

• 気に入らない

• 気に入らない男だ

• きみのお母さんのことも、もちろん知っている

• それから毎日、彼は塔のまわりをぐるぐるすると回りつづける

• 件の小屋で出される飯は、いったいどこから食材を調達しているのだろうか、それなりにう

まい

• 寝ているあいだに代わりにこの仕事をやっているといるという奴と会ったことはない

• 仕事の時間は、ときには夜だったり、ときには昼だったり

• 二晩続くこともあれば、半日で済むこともあった

• 呼ばれて起きて、それからもういちど呼ばれるまでずっとずっと回りつづける

• ずっとずっと塔を見つめつづける

• 退屈ではあるけれど、ずいぶんと楽な仕事だ

• あまりに楽なので、ここから逃げようとも思わない

• だから彼は真面目に、真面目に仕事をこなした

• 囚人になる前からずっとそうだったからだ

• そうこうしているうちに、いつも小屋で寝てばかりいる官吏ともずいぶん打ち解けた

• 彼らも二交代で働いているらしいが、やっぱり代わりの官吏と会ったこともない

• ただぐるぐると回りつづけるだけだ

• きみのお兄さんのことだって、きみのお姉さんのことだって知っている

• 宇宙をいくつかめぐってね、勝てる方法を見つけてきたんだ

• つまらない方法だけれども、いや、それがなにかは言わないけれど、とにかくきみは、ぼくに勝てない

• 気に入らない男だけれど、負けるのはほんとうらしい

• わたしにはわかる

• ある日のこと、官吏はこの塔のことについてすっかり話してくれた

• 正月だからと酒が振る舞われ、気が大きくなっていったんだろう

• 塔のまわりをぐるぐる回るわたしにまとわりついて、しゃべりはじめた

• この塔はな、自分たちの爺さんやひい爺さんが生まれるよりずっと昔からここに建っているらしい。けどな、昔はもつともつと細かったんだと。まあ、こんな痩せた土地、めったに人も来ないし、昔の人はおおらかだったんだろうな、こんなおかしな塔だって、そこにあることを疑問にも思わなかった。だがあるとき、塔が年々すこしずつ太くなっていつていることに、だれかが気付いた。狂人だな。だが、狂人の言うことを真に受けるやつもいる。それから幾人かの学者がやってくるようになって、それこそ何世代にもわたってやいやい調べた結果、わかったことがある。どうもこいつは、だれかに見張られているときはびくともしないけれど、だれの目にも届かなくなったときには、すこしずつ太くなっていくんだと。なかなかたいへんなことじゃないか。それを聞いた郡の長官は、なんで信じちまったかは知らないが、こいつをずっと監視しておけと命じた。放っておいたら自分の治めるこの郡が塔に埋め尽されてしまう

恐れたんだそうだ。あなたが死ぬまでだれも見てなかったとしてもそんなことは起こらないと学者たちは言ったけれど、やっぱりこいつも狂人だったんだろう。それからさ。こうして塔以外になにもないこの土地に小屋を建てて、囚人に監視させるようになったのは。まあでも、人間のやることだ、なまけちまうこともある。そんなときに塔はちよつとずつ太つていつて、今じゃこんなにでかい塔になつちまつた。らしい。……そうそう、だからつてなまけようなんて思うなよ。もしお前がなまけてるのを見つけたら、おれはお前をこの鉈で斬り殺さなきゃならん。ずつと昔からそういうきまりになつてるんだ。おまえの前任者もなかなか良い奴だったが、まあなんだ、さつき言つたような事情でな。そんなときにはな、お前みたいな気の小さい勤勉な囚人を代わりにつけるのが決まりなんだ。だからお前も仕事に励んでくれよ。おれは監視するお前を監視するだけだ。そうしているうちに、そうさな、もう何年かすれば郷に帰れるはずなんだ。給金がいくら出ているかわからないけれど、妻や子供が飢えちまうようなことにはなつていないはずだ。そりやそうさ、ここでいくら金をもらつてもしかたがない。あいつらにくれてやるよう頼んであるんだ。そうだな、もう何年経つたことか

• だつたら、どうしたらいい？

• わたしは常に完全なパーをだしてきた

• 常に完全なグーをだしてきた

• 完全なチョコキをだしてきた

• ほんとうに完全だったか

• そうでない、あえて言えることがあるとすれば、完全でないことができなかった

• この宇宙では、ほんのすこしのものだけが完全で、あとはすべてが不完全だった

• その完全なすべてをわたしが背負っていた

• きつとそう、きつとそうだったはず

• 負けてしまおうか？

• じゃん

• でも

• 完全でないことができないということが、それがどんなことかなんて、わたし以外のだれにもわからない

• おれはこれでも自分の故郷が好きでな、星がきれいに見えるんだよ。ここらだって開けてるからよく見えると思うだろう。だけど違うんだ。星がいつとうよく見える土地というのがこの世界にはある。おれの故郷はそんな場所のひとつだ。そこから離れるにしたがつて、星たちはどんどんぼやけてくる。まあ、ここだって俺の知っているうちではなかなかよく見えるほうだ。

おれの故郷にはかなわないけれど。しかし残念だな、お前はずつとあの塔を見ていなきゃならない。おっと、目を離すんじゃないぞ、さつきも言っただろう、お前が目を離せばおれはおまえを……

• けん

• そうだ、そうやっておまえはずつと塔を見ていればいい

• ただ、つまらんな。おれにだって人を斬ってみたくなるときもある。ここでおまえが目を離してくれれば、この退屈も解決つてもんだ。ただ、それはそれで面倒ごとを引き起こしもある

● 難しいもんだよ、ほんとうの仕事ってのは。おまえのようにただ見ているだけ、ただぐるぐる回りつづけるだけの仕事にはない難しさだ

● しかし、それにしてもつまらない。こんなに晴れわたった夜なのに。おれはこんなにも気分が良いのに

● そうだ。そうだな、じゃんけんでもしよう。しょうじゃないか

● いや、お前は目を逸らしてはいけない。それがおまえの仕事だからだ。それじゃあ勝ったか負けたかわからないだろうって？ 問題ない、おれが教えてやる。お前がどんな手をだしたかは、お前が知っている。おれも知っている。いっぽう、おれがどんな手をだしたかは、おれしか知らない。だからおれが教えてやる。そうすれば、勝ったか負けたかもわかるってもんだ。名案じゃないか。いいだろう？ おれだつてつらいんだ。おれの女房が、じつはおれのことを好いていないことくらい、そのくらい気づいてるんだ。おれがいたときだつて、隣の独り身の女と三日にいったんは会っていた。おれがいなくなつた今ではどうなっているか。そんなことわかつたもんじゃない。子供は勝手に育つてる。悪いことじゃない。だが、いいことでもない。だからじゃんけんをして気を晴らそうと思つたわけだ。名案じゃないか。ほら、だから、ほら、じゃん、けん……って、いや、やれよ。じゃんけんをしようって言ってるだろう。毎日言われたとおり馬鹿みたいにくるくる回っているわりには融通の効かない奴だ。ほら

● じゃん

● けん

● でも、完全でなくなるとはどういうことか、それはわたしにはわからない

• 完全でありつづけることと、完全でなくなること、どっちが怖い？

• だったら

• 親指をひろげて

• おとうさんゆび

• ぼん、つてな

• 人差し指をひろげて

• おかあさんゆび

• ふむ、お前はパーをだした

• 中指をひろげて

• おにいさんゆび

• おれはチョコキだ

• 薬指をとじて

• 死んだ、おねえさんゆび

• おれの勝ちだ

• 小指をとじて

• さて、もう一度やってみるか。もちろんただそのままやるのはつまらない。たとえば、おまえがもし勝ったなら、おれとおまえの役割を交代するというのはどうだろう。賭けてやっただ。

そうすればでくのぼうのおまえもちょっとくらいはやる気を出すつてもんだらう。どうだ？

まあいいだろう、それでいこう

- ほら
- じゃん
- けん
- わたしはもういなくなるから
- ぽん

そうして、わたしはあなたに勝って、神の不在を証明する